

■ 学歴

1. 2006 年 天使大学大学院 助産研究科 助産専攻

■ 学位

1. 2006 年 助産修士（専門職）

■ 研究分野

1. 助産学
2. 母性看護学

■ 研究キーワード

1. 助産ケア、助産師外来、分娩介助
2. バースレビュー、出産想起、分娩・出産の振り返り
3. 助産学生、看護学生、乳がん検診

■ 研究課題

1. 助産学生の分娩介助の習得過程に関して考察する
2. 分娩体験におけるバースレビューの意義や役割について考察する
3. 乳がん検診・自己触診法の啓発活動を通しての学生の学びについて考察する

■ 担当授業科目

- | | | | |
|-----|---------------------|----------------|--------|
| 1. | 母子の心理・社会学 | (前期) 必須 | (助産別科) |
| 2. | 助産診断・ケア学Ⅰ 妊娠期 | (前期) 必須 | (助産別科) |
| 3. | 助産診断・ケア学Ⅱ 分娩期 | (前期) 必須 | (助産別科) |
| 4. | 助産診断・ケア学Ⅴ 周産期のハイリスク | (前期) 必須 | (助産別科) |
| 5. | 助産診断・ケア学Ⅵ 健康教育演習 | (通年) 必須 | (助産別科) |
| 6. | 助産診断・ケア学Ⅶ 助産過程演習 | (通年) 必須 | (助産別科) |
| 7. | ウィメンズヘルスケア | (前期) 必須 | (助産別科) |
| 8. | 助産管理学 | (通年) 必須 | (助産別科) |
| 9. | 助産学基礎実習 | (前期) 必須 | (助産別科) |
| 10. | 助産学実習Ⅰ (正常) | (通年) 必須 | (助産別科) |
| 11. | 助産学実習Ⅱ (正常逸脱) | (後期) 必須 | (助産別科) |
| 12. | 母性看護方法論 | (2年後期) 必須 | (看護学科) |
| 13. | 母性看護学演習 | (3年前期) 必須 | (看護学科) |
| 14. | 母性看護学実習 | (3年後期～4年前期) 必須 | (看護学科) |

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1. 授業科目名【助産診断・ケア学Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ】

助産診断・ケア学では、基礎的知識及びフィジカルアセスメント、助産技術の習得ができるように、事前課題やワークシートなどを活用した。学生自身が意欲・関心を持ち、自ら主体的に学習できるように工夫した。双方向型の授業を意識し、グループワーク、ディスカッションや発表を取り入れるなど、学生同士学びの共有ができる授業を心掛けた。演習においては、最新のガイドラインなどを活用し、机上の学習で得た知識を統合させ、ケアの実践につなぐことができるように、担当教員とともに環境を整えた。また、実際に臨床の場において体験する場面やケアなどを積極的に取り入れて授業を展開した。

1. 助産診断・ケア学Ⅰ（妊娠期）

母性看護学で培ってきた知識をより深く掘り下げ定着させるために、ワークシートを用い、個人ワークとグループワークを併用しながら知識習得のための授業を目指した。特に、妊娠期における保健指導の必要性やその根拠について理解し、対象者にとって必要な指導を導き出せるように意識しながら授業を展開した。演習に関しては、演習内容を事前に提示し、自己学習を行った上で臨むようにした。実習において、必須である妊婦健診や保健指導に伴う技術に関しては、より具体的にイメージができるよう基本技術に加え、演習内容に妊婦と助産師役、第3者の視点も含めロールプレイを行い、ケアに結び付けられるよう演習を組み立て取り組んだ。演習後は、観察したことをアセスメントするとともに、経験したことに対する振り返りの機会をもった。また模擬妊婦体験を通して、妊婦として日常生活を体験する機会もち、その経験を共有し、ケアへ結びつけることができるように工夫した。

2. 助産診断・ケア学Ⅱ（分娩期）

事前課題を課して母性看護学で得た知識を復習するとともに、助産の専門的知識の習得に結びつけることができるよう準備をした。分娩期の生理・分娩経過に伴う産婦や胎児の変化、支援方法について学生自身が自ら考え、意欲・関心が持てるように動画や模型を使用し、授業を実施した。また、知識の定着を確認できるように小テストを行い、結果をフィードバックし復習へつなげることができるように工夫した。演習に関しては、演習内容を事前に提示し、自己学習を行ったうえで臨むようにした。産婦人科ガイドラインや助産業務ガイドラインを中心に臨床での基準に沿って、また科学的根拠を持って、技術を実践できるよう意識づけを行った。実習において必須である分娩介助やそれに伴う技術に関しては、より具体的にイメージができるよう基本技術に加え、動画の活用、事例を用いての演習を組み立てて取り組んだ。また、学生が胎盤の模型を各自作成し、使用することで主体性を促した。分娩経過に沿って、経過診断と時期診断が行えるように、実際にバルトグラムの記載を行いながら、情報収集・アセスメント・ケアの方向性を常に修正し、分娩のケアの演習を行った。記録の重要性にも触れ、助産録など責任をもって記載することを実施した。感染対策についても学生自身がより意識して行動できるように工夫した。

3. 助産診断・ケア学Ⅴ（周産期のハイリスク）

周産期におけるハイリスクの対象の方のケアについて、実際の事例などを用いながら対象者のイメージを持てるように工夫した。この科目は助産学実習Ⅱにつながるため、実習で関わる事例の助産計画をレポートとして課すことで、実習に活用できるように工夫した。

4. 助産診断・ケア学Ⅵ（健康教育演習）

	健康教育演習の妊娠期を主に担当した。助産診断・ケア学Ⅰ（妊娠期）と連動しながら、保健指導の指導案とパンフレット（リーフレット）の作成をおこない、発表会を実施し学生同士の共有を行った。担当教員とともに、保健指導案の作成方法や妊娠期に必要な保健指導の内容に関して、きめ細やかな指導を心掛けた。 <u>5. 助産診断・ケア学Ⅶ（助産過程演習）</u> 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期と事例を通して、各期における助産過程の演習を行った。担当教員が学生3～4人を担当して、それぞれの学生の進度に合わせて指導した。また発表会を通じて共有を行うとともに、学生自身それぞれの考え方を表現する機会をもつことで、実習への準備となるよう支援した。また講義の時期を各期の授業と合わせることで、連動して学びを深めることができるように工夫した。
2.	授業科目名【助産学基礎実習】 基礎助産学実習では、基本的な助産技術の習得および助産過程の展開ができるように学生の支援を行った。具体的には、対象者を捉えることからはじめ、母子の安全を考え、また科学的根拠に基づいたケアを学生が提供できるように支援した。学生個々の価値観等を考えながら支援するとともに、助産ケアに関して、フィジカルアセスメントをしたうえで、今後どのようなことが予測されるか、対象者に必要なケアは何か、学習で得た知識を活用できるようにフィードバックを行い工夫した。実習後には、面談を行い学生の学びの振り返りができるよう支援するとともに、学生全員で実習のまとめ発表会を行うことで、基礎実習での経験が次の段階へつながるように工夫した。
3.	授業科目名【助産学実習Ⅰ・Ⅱ】 実習目標に沿って、助産技術の習得および助産過程の展開ができるよう学生の支援を行った。特に助産学実習Ⅰ・Ⅱでは学生が対象者や家族を多角的に捉え、気づき、対象者に寄り添ったケアを提供できるように意識して支援した。 <u>1. 助産学実習Ⅰ（正常）</u> 正常経過と逸脱経過の判断を行いながら、倫理的視点を常に持ち、ケアを実施できるよう助言等の工夫をした。臨地実習では、臨床指導者や他の教員と連携をとり、意見交換しながら支援するとともに、学生がより対象者の個別性を考えたケアを実施できるように工夫して、フィードバックを行った。また、正常からの逸脱の事例を経験した学生には、1つ1つの場面やケアの振り返りを行う機会を持つとともに、グループ間での情報共有やディスカッションを通し、より客観的に学びを共有することができるよう支援した。 <u>2. 助産学実習Ⅱ（正常逸脱）</u> 逸脱の経過やハイリスク疾患の学習をしっかりと行い、対象の理解へつなげるとともに、必要な保健指導を考え実施できるよう指導者と連携を図り支援した。またNICUでの実習では、NICUでの実習を通して、対象者及び家族の支援レポートを考えることができるように支援した。 全ての実習後には、面談を行い学生の学びの振り返りができるよう支援するとともに、学生全員で実習のまとめ発表会を通し、臨地実習で学生が経験したことを共有する機会をもち、助産学生としての学びの総まとめとなるように支援した。
4.	授業科目名【母性看護方法論】 2024年度は、産褥期・新生児期を担当した。母性看護は、対象が女性や子どもと家族であるため、学生が自分自身の身体と結びつけることができるよう、日常生活での関連性を示すとともに、産褥体

	操など学生が机上でも体験できる方法も取り入れた。学生が主体的に学習できるように、講義の中でワークシートを用いた学習や小テストなどを取り入れ、学生自身が知識の習得状況を確認できる機会を設けた。母性看護学をより具体的にイメージでき、また興味を持てるよう写真や動画などの映像を取り入れるなどの工夫をした。また、学生が教科書の知識と結び付けてイメージしやすいよう臨床の現場で起こりうることや自身の経験、実習で先輩たちが経験したことなど具体的な事例等を用いて、看護者としての考え方や対象者との関わり方について考える機会をもてるよう工夫した。また、時事的な話題も加えることで、学生が日常生活中で母性看護を身近に意識できるよう工夫した。
5.	授業科目名【母性看護学演習】 母性看護学演習は、看護過程演習と看護技術演習からなる。看護過程演習においては、看護過程に関しては、ワーク型の演習を取り入れ、小グループ単位で担当教員が支援し、個別的で細やかな指導を実施した。また、看護技術に関しては、実習の状況に近い形で技術演習を行った。また動画などをClassroomへ掲載することで、学生が繰り返し技術を学べるように教材を工夫した。
6.	授業科目名【母性看護学実習】 臨地実習では、実習指導者と相談しながら、学生が学びを深めることができるよう感染対策を行いながら、見学やケアの実施の機会が得られるように工夫した。学生自身がケアを受ける立場の状態を体験することで、対象者の状況や気持ちを考える機会を設けた。ケアの振り返りやカンファレンスを多く取り入れ、学生自身の気づき、学生同士の気づきを大切にし、ケアをより深く考えることができるように工夫した。また、実習初日に学内で看護技術について振り返り、練習をすることで落ち着いて実習に臨めるように工夫した。臨地実習を行う中で、主体的に学生が興味をもったことに関してテーマを決め、テーマカンファレンスを実施した。実習の総括として、まとめカンファレンスを行うとともに、実習最終日に面談を行い、学生が学びの振り返りをできるよう支援した。

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2003 年 4 月～現在に至る	日本看護協会	佐賀県看護協会助産師職能委員 (2013 年 6 月～2015 年 5 月) 福岡県看護協会代議員 (2024 年：1 期 1 年)
2.	2017 年 3 月～現在に至る	日本助産学会	
3.	2018 年 4 月～現在に至る	日本母性衛生学会	

■ 研究業績等に関する事項（2024 年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
(著書)					
1.					
2.					

3.					
(学術論文)					
1.					
2.					
3.					
(翻訳)					
1.					
2.					
3.					
(学会発表)					
1.					
2.					
3.					

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（ ）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
1.				
2.				
3.				

(2) 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
1.				
2.				
3.				

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2024 年 11 月 6 日	中 1 ・ 高 1 は ない ち プロジェクト Mission 夢トーク	福岡女学院中学校・高等学校 ボランティアとして参加

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期	会議・委員会等の名称	役 職 名 等
--	-----	------------	---------

	期 間 等	(内 容)	
1.	2019 年～現在に至る	教務委員会	
2.	2019 年～現在に至る	助産別科 教務全般担当	
3.	2019 年～現在に至る	助産別科 助産師国家試験対策担当	
4.	2019 年～現在に至る	助産別科 受胎調節実施指導員資格認定 に関することを担当	
5.	2016 年～現在に至る	助産別科 学生アドバイザー	
6.	2024 年 6 月・7 月	助産別科 オープンキャンパス担当	